

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2022年 10月 5日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 人間・環境学研究所 共生人間学専攻

職 名 教授

氏 名 藤田 耕司

助成の種類	令和4年度・国際会議開催助成		
国際会議名	Joint Conference on Language Evolution (和名:言語進化合同会議)		
開催期間	2022年 9月 5日 ~ 2022年 9月 8日		
開催場所	金沢市文化ホール (石川県金沢市高岡町15番1号)		
参加者	総数 約 430 名	内 訳 国内 現地参加約130名, オンライン参加約30名 海外 現地参加約130名, オンライン参加約140名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	事業に要した経費総額	19,803,898 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 科学研究費補助金、石川県・金沢市補助金、参加費収	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	旅費交通費	4,018,315	
	会場・会議費	2,962,640	
	印刷製本費	28,558	
	通信運搬費	4,273,311	1,000,000
	謝金	269,500	
消耗品費	589,880		
その他(業務委託費)	4,669,311		
レセプション費	2,992,383		
合 計	19,803,898	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) コロナ下の困難な状況でハイブリッド開催となりました。そのための通信運搬費がかさみましたが、交付いただいた補助金のおかげで問題なく実施することができました。ありがとうございました。		

成果の概要

藤田耕司（人間・環境学研究科 教授）

会議名：言語進化合同会議 Joint Conference on Language Evolution (JCoLE)

<https://sites.google.com/view/joint-conf-language-evolution/home>

開催期間：2022年9月5日～9月8日

会場：金沢市文化ホール（石川県金沢市高岡町15-1）ならびにオンライン

主催：文科省科研費新学術領域研究「共創的コミュニケーションのための言語進化学」
（略称「共創言語進化」Evolinguistics, <http://evolinguistics.net>）

共催：Evolang, Protolang

協賛：京都大学教育研究振興財団，石川県，金沢市，Royal Society Publishing,
John Benjamins Publishing Company, DMM 英会話

令和4年度国際会議開催助成の交付（助成額1,000,000円）を受けて、国際会議「言語進化合同会議（以下JCoLE）」を上記のとおり開催しました。このJCoLEは人間言語の起源・進化を主要テーマとする2つの既存国際学会、EvolangとProtolangを私たちの科研費プロジェクト「共創言語進化」(Evolinguistics)が仲立ちをすることで連携させ、これら3つの団体が一堂に会するという前例のない国際会議として企画されたものであり、「共創言語進化」の5年間に渡る活動の総まとめとして大きな意義をもつものでもあります。この「共創言語進化」は上記2学会がこれまで内容的に偏りがあり時に対立していたことを問題視し、これを克服して多数の関連分野の研究者が連携してより総合的な言語進化研究の確立と推進を行うべく立ち上げられたプロジェクトですが、JCoLEは領域名にある「共創」の理念を十分に実現するものであり、これがわが国において開催の運びとなったことは、私たちの活動が国際的にも高く評価されたことの証しと言えます。

本会議では4日間に渡り、基調講演4件、招待講演8件、ワークショップ14件（うちオンライン4件）、一般研究発表99件、ポスター発表109件（うちオンライン60件）が行われました。コロナ下の困難な状況におけるハイブリッド形式による開催となりましたが、国内外計約430名の参加者を得て、盛会のうちに閉幕しました。参加者の内訳は、国内現地参加約130名（うち学生54名）、国内オンライン参加約30名（うち学生5名）、海外現地参加約130名（うち学生59名）、海外オンライン参加約140名（うち学生51名）でした。海外は約30カ国からの参加があり、国別にみると英国・米国がそれぞれ約40名と多く、次いでスイス27名、ドイツ24名、オランダ

22名、フランス15名、ポーランド11名などとなっています。また本会議の開催にあたっては受付業務や会場整備などに多数の大学院生らの協力を得ましたが、大規模な国際会議の運営に携わる経験は彼ら若手研究者にとっても貴重なものとなりました。会議終了後にも茶道教室などの交流イベントが行われ、多数の海外研究者にわが国の文化を直接経験してもらえる有意義な機会となり、好評でした。

基調講演は以下のとおりです。1. “What Can We Learn from Bird Songs and Rat Tweets?” (Kazuo Okanoya, 帝京大学教授, 神経生物学), 2. “Hunter-Gatherers of Words” (Cedric Boeckx, University of Barcelona 教授, 生物言語学), 3. “A World of Sign Languages” (Carol Padden, University of California 教授, 手話言語学), 4. “Interaction in Animal Communication” (Simone Pika, Osnabrück University 教授, 認知生物学)。いずれも各分野を代表する世界的な研究者であり、45分の講演と15分の質疑応答を通じて先端研究成果の一部を公開していただきました。

また招待講演は30分の講演と15分の質疑応答からなり、1. “Multiple Attention Underpins the Co-evolution of Thought and Communication” (Koji Fujita, 京都大学教授, 理論言語学), 2. “Beyond Common Descent: Cooperative Breeding and Language Evolution” (Judith Burkart, University of Zurich 教授, 比較心理学), 3. “Emergent Constructive Approach to Evolving Linguistics” (Takashi Hashimoto, 北陸先端科学技術大学院大学教授, 複雑系科学), 4. “Linking Language Evolution, Language Acquisition, And Language Diversity” (Limor Raviv, Max Planck Institute for Psycholinguistics, Nijmegen 教授, 動物認知科学), 5. “Vocal Learning and the Evolution of Beat-based Rhythmic Processing” (Ani Patel, Tufts University, 音楽神経科学), 6. “Historical and Ecological Aspects of The Evolution of Human Language Faculty” (Yasuo Ihara, 東京大学准教授, 進化人類学), 7. “Inferential Nature of Gesture and Its Role in Evolution of Language” (Harumi Kobayashi, 東京電機大学教授, 発達心理学), 8. “Language Evolution—Updating the Lens of Primate Communication” (Zanna Clay, Durham University 教授, 霊長類学) というバラエティに富んだ講演が行われました。

ワークショップでは “The Role of Pragmatics in the Evolution of Language,” “Constructive Approaches to Co-creative Communication,” “Machine Learning and the Evolution of Language,” “The Origin of Symbolism in Palaeolithic Societies,” “Segregation and Overlap between Action and Language” などの多岐に渡る集中的な議論が多数行われ、一般口頭発表やポスター発表とともに、文理融合型の言語進化研究の極めて高い学際性を反映したものとなりました。なお、すべての講演とワークショップ、一般口頭発表はビデオ録画され、期間限定で会議登録参加者に視聴可能となっています。また会議全体の予稿集はウェブ上で公開されており、https://evolang.org/jcole2022/proceedings/jcole2022_proceedings.pdf からダウンロード可

能です。

閉会式では Evolang, Protolang それぞれの代表者から今後の開催予定がアナウンスされましたが、一定期間を置いて継続的な JCoLE 合同開催の可能性も検討されているところです。その記念すべき第1回大会をわが国において開催できたことは、私たち準備・運営に携わった全員にとって大きな喜びであり、特にハイブリッド開催の実現に京都大学教育振興財団の補助金を有意義に活かすことができたことを、深く感謝しつつご報告いたします。

JCoLE の模様



招待講演



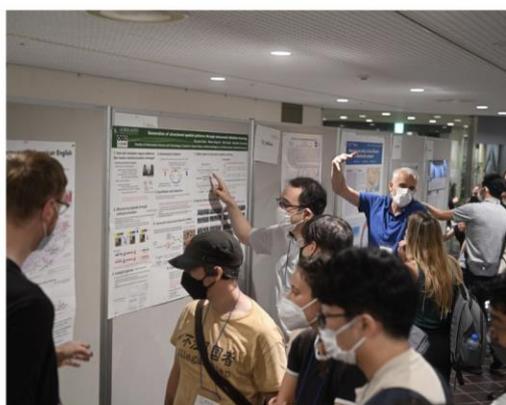
一般研究発表



受付デスク



一般研究発表



ポスター発表



リセプション